

P-33

透析患者における緑茶タンニン投与の影響

富山医科薬科大学 和漢薬研究所¹⁾、富山医科薬科大学²⁾、長谷川病院透析医療センター³⁾
 ○横澤隆子¹⁾、大浦彦吉²⁾、柴田 透³⁾、金子 稔³⁾、長谷川眞常³⁾

【目的】わが国の維持透析患者数は年々増加し、この患者数増加の要因としては透析学の進歩により維持透析患者の生命予後が向上したことが挙げられているが、一方、新たに透析療法を導入せざるをえない末期腎不全患者の発生が後を絶たないことも見逃せない。筆者らは慢性腎不全の薬物療法の有用性を和漢薬に求め、その効果、作用機序、有効成分等について研究を進めてきたが、腎不全では酸化的ストレス状態にあることから、Cr 酸化物の creatol の発見を契機として、Cr 酸化機構の解明に着手し、加えてタンニン含有生薬に抗酸化活性を有することを明らかにした。このようなタンニンは茶葉にも多量に含有することから、緑茶タンニンの腎に対する作用を明らかにした^{1,2)}。このような基礎研究に立脚し、本研究では酸化亢進状態にある透析患者に投与し、その有用性について検討した。

【対象と方法】長谷川病院通院の慢性血液透析患者50例（男性37例、女性13例）で、平均年齢は50.4歳（27～76歳）、平均血液透析期間は71.6ヶ月（5～183ヶ月）であった。慢性腎不全の原疾患は慢性糸球体腎炎が最も多く31例で、次いで嚢胞腎6例、悪性高血圧3例、その他巣状糸球体硬化症、糖尿病性腎症、ネフローゼ症候群、痛風腎などで、週2ないし3回の血液透析を受けていた。なお手根管症候群やアミロイド関節症を合併した場合には高性能膜透析を行ったが、普通は非高性能膜透析を行った。緑茶タンニンはゼリーに混合したものを1回200mg、1日2回投与したが、患者の嗜好の変化を考慮し、カプセルに詰めて投与したケースもあった。採血は1ヶ月毎に、透析直前に行った。

【結果】緑茶タンニン（1日400mg）を6ヶ月間用いたところ、血中Cr、MGレベルの低下とともに、MG/Cr比の低下を認め、また β_2 -MGの低下と一部の患者で関節痛の改善効果を示した。

【結論】以上の成績は緑茶タンニンが透析患者の酸化亢進状態を改善する可能性を示唆するものである。

1) Yokozawa T., *et al* : Biosci. Biotech. Biochem., 58, 855-858 (1994).

2) Yokozawa T., *et al* : Biosci. Biotech. Biochem., 60, 1000-1005 (1996).